



2014年(平成26年)

11月号(No. 834)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

ネパール・ヒマラヤ、ムスタン山群の 未踏峰・マンセイル峰に初登頂	1
支部登山指導者講習会開催さる	4
第30回全国支部懇談会・埼玉大会報告	5
中村保名誉会員、UIAA名誉会員となる	7
追悼 秦野一彦先生を偲ぶ	8
追悼 稀代の探検登山家 大西保さん	9
さんけん通信	10
活動報告	11
集会委員会／資料映像委員会	
支部だより	12
北海道支部／東九州支部	
新入会員	13
図書紹介	14
図書受入報告	16
会務報告	16
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
日本山岳会所蔵資料紹介 No.16	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

ネパール・ヒマラヤ、ムスタン山群の未踏峰・
マンセイル峰に初登頂

日本山岳会学生部 ムスタン女子登山隊

今春、多くの未踏峰が解禁されたネパール・ヒマラヤで、JAC学生部女子登山隊が、ムスタン山群のマンセイル峰(6242m)の初登頂に成功した。禁断の地・ローマンタン北方の頂に初めて立った女子隊の朗報をここにお届けする。

9月29日13時(現地時間)、私たちは目標にしていた未踏峰・マンセイル峰(Mansail 6242m)の初登頂に成功した。

5月21日、中・ネ国境線上を含む104座の未踏峰が解禁された。事前情報の段階からあらかじめ申請準備を行ない、公になったところで即座に申請(Mansail(6242m)・Mansail South(6251m)・Mustang Himai(6165m)の3座の許可を取得した。長い間禁断

のエリアとして残されてきたローマンタンから北に、外国人として初めて足跡を残したことになる。

登頂したのは隊長の井上由樹子(24歳 会員番号15454 武蔵野大4年)、長谷川恵理(22歳 15594 創価大4年)、中村真理子(22歳 15607 筑波大4年)、および顧問として同行の谷口けい(42歳 15634)の4人。体調を崩していた三島夏帆(21歳 15614 弘前大3年)は29日、BC

まで到着したが登頂は断念した。事前の偵察では、ピーク南面のスラブ状岩壁または東稜の脆い岩稜をルートと想定していたが、困難が予想された。

アタック当日、C2(5684m)出発時には青空が出ていたもののやがて小雪が降り始め、稜線では本降りに。東稜北面(チベット側にルートを見つけ、1本のロープで4人がアンザイレレン、携行したギア類をフル活用しての苦労の未踏の登頂だった。一番高い地点はピナクル状となっていて立っていないが、この肩の部分の山頂としたGPSの標高は6165mを表示(グーグル・アースでは最高点は6148m)。

下山は懸垂下降で始まり、さらに激しい降雪で長い氷河上をヒド

ン・クレバスに神経を遣いながらラッセル。その日以降、深雪のため残り2座の縦走は断念。BCに戻ったところで10月1、2、3日と、モンズーン明けを知らせるアネハヅルの大群が飛来、感動の瞬間だった。

4人の女子隊員は、昨冬、立山の国立登山研修所で知り合い、意気投合して一気にヒマラヤ遠征まで実現させてしまった。井上が隊長として仲間を募り、当初は来年春の遠征を計画、秋シーズンは偵察行を考えていた。ところが、未踏峰の許可取得が現実味を帯び、それなら他隊に先を越される前にやつつけてしまおうと、6月、梅池の早大ヒュッテに全員集まったのが最初の準備会だった。出発まで3ヶ月弱。準備とトレーニング山行



東稜から見上げたマンセイル峰

および全員参加の剱岳合宿を計画。即席隊ではあるが、効率良く準備を進めることができた。

過去の学生部遠征では、学生のみでの隊員編成だったが、昨今の大学事情では引率の同行者がどうしても必要と判断。母体である各4大学の部長先生や父兄にルームへ集まっていただき説明会を開催。安全管理を中心に説明した。

学生たちが国立登山研修所で直接指導を受けた谷口けい氏に、アドバイザーとして参加してもらうのがいちばん適切であろうと、無理を承知で長期間の同行を依頼することとなった。谷口氏は2008年、ピオレドールを受賞した名実ともに日本最強の女子クライマー。



マンセイル峰頂上に立つ3名の女子大生隊員

あまりに実力のかげ離れた学生たちだけに、遠征中は終始、技術研修とヒマラヤ登山のABCを徹底的に仕込んでもらうことになった。谷口氏も人跡未踏のムスタン国境線上の登山と、生きたチベット仏教が残る希少な文化圏の山旅に興味を示してくれた。

ほとんどの隊員が海外に出るのも初めてというレベルから始まる遠征に、初っ端から体調を崩す隊員が続出。原因不明の感染症に最後まで悩まされた三島は、キャラバン中高熱が続いて行動不能になり、ヘリでレスキュー。カトマンズのCIWECクリニックに入院。1週間の治療(原因が特定できず対処療法のみ)・静養の後、再度ベ

ースキャンプを目指したが登頂は断念。体調管理には十分な注意を払ったつもりだったが、清潔な日本の衛生環境で育った学生たちがいかに感染症に弱いかが露呈される結果となった。

ローマンタンより北の谷に入るには、地元民とのトラブルを回避する方策が必要との事前情報があり、ローマンタン・コミッティが派遣したりエゴン・オフイサーのパスンが同行することになった。僧侶でもあるので、正統なブジャ(祈祷)もやってくれた。最後の集落チウムジュンを過ぎると情報のないルートとなり、キャンプ地の選定に苦労した。本流のチュマコールの水は濁って使えず、支流の流れを探す。

9月20日、BC建設。のどかな放牧地で、ヤクやシカ、ウサギ、マーマットがいる。上部へは人や動物の歩いた形跡がなく、帰路のルート確保のためケルンを積みながら登高。

25日、C1建設。ここからアタックの予定だったが思いのほか歩きづらく、ぐらぐらした大岩の連続で距離を稼げず、26日にC2を建設。隊員たちにとっては初めての

高度で荷上げに苦勞し、結局、サーダーと谷口とで大部分の共同装備を荷上げ。さらに上部偵察は谷口にまかせることになった。

27日、快晴。氷河上5800mまで偵察。「マンセイル峰は見えないが、急峻な岩稜で登れそうに思えない。南峰は登れるかもしれない。ムスタン・ヒマール峰は見えない」という結果。C2に戻るが長谷川と井上は高度の影響で食事が進まず。しかし、中村は最初から一度も体調を崩さずこの高度にもうまく順応している。いったん全員C1に戻り、体調を整えることにした。翌朝、全員の健康状態は良好。早速C2へ登ることとする。

28日、晴れ。お昼過ぎにC2到着。谷口が再び偵察、5996mの東稜上コルへ到達。「南壁はスラブ、東稜は脆い岩稜。北面に氷河はあるが、山頂までつながっていない。明日は東稜から北面に回り込んで山頂を狙う」と衛星携帯で知らせてきた。

29日、晴れ。5時出発。氷河上でアンザイレンし、谷口が先頭で固定ロープを張っていく。やがて吹雪となったが、13時登頂。17時15分、C2帰着。下山中、わずか3時



ヒマラヤを越えるアネハヅルの大群

間の間に20cmほどの積雪。1日アタックが遅れていたら登頂は不可能だった。一晚中激しい降雪。

30日、曇り。山は雪雲で覆われ、深く積もった雪の上をC2よりC1へ、さらにキャンプ撤収後、BCまで下山。サードとコックが荷下ろしを手伝ってくれた。BCでは到着したばかりの三島が迎えに来て、再会を喜び合った。

10月1日、快晴。三島が急激に高度を上げたこともあってか再び発熱。サードほかネパール人スタッフに支えられながらの下山となってしまった。深く反省するところである。

馬に乗ったりして、のんびりとローマンタンへ下山。すでに乾季

で車道も開通していたため、1日でジヨムソンまで下山できた。翌日はマルファの「河口慧海博物館」を訪問。114年前、日本人で初めてチベットを目指した河口慧海の足跡をたどる山旅でもあった。

井上隊長のコメント。「こんなすばらしい遠征が経験できて、多くの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。谷口さんにはいつも怒られてばかりでしたが、大変有意義で楽しい39日間でした。帰国したら皆様へのご報告と、学生部やJACで今後につながる登山を伝えていきたいと思っています」

なお、今回開放された104座には既登のピークも複数含まれており、標高や緯度・経度、山名の間違いなど多くの指摘をネパール観光省が受けている。未踏峰の登山許可取得に関して、観光省発表の記録だけでは判断が難しいことをご留意いただきたい。

【出発からの行動概要】

9月5日 関西(空路)カトマンズ
6日 カトマンズ(空路)ポカラ
10月20日 ポカラ(空路)ジヨムソン
ン・エクレバッティン・チュサン・サマル・ガミ・ローマンタン・チュムジュン・BC

(4888m)

25日 BC→C1(5476m)

27日 C1→C2(5684m)

29日 C2→マンセイル峰登頂

C2

30日 C2→BC

10月1日 2日 BC滞在

3日 BC→ローマンタン

4日 ローマンタン(車)ジヨムソン

5日 ジヨムソン(空路)ポカラ

6日 ポカラ滞在

7日 ポカラ(空路)カトマンズ

8日 11日 カトマンズ滞在

12日 カトマンズ発(空路)

13日 成田着

【報告会のお知らせ】

学生部で活動する4隊合同で行ないますので、どうぞ学生たちの成果をお聞きにきてください。

日時・12月13日(土)

開場・9時30分 ①10時・学習院

大学／ザンスカール ②11

時・東京農業大学／ムスター

グアタ ③13時・法政大学／

アマダブラム ④14時・学生

部女子ムスタン 終了・15時

30分

場所・法政大学58年館877教室

(定員144名 詳細はJAC

のHPにて。

年次晩餐会登山報告会でも発表いたします。

【速報】2014ピオレドール・アジア谷口けい、和田淳二のペアが受賞

11月6日、韓国ソウル市で受賞者発表と授賞式が行なわれた。4月21日から38日間、アラスカ州デナリ国立公園・ルース氷河で4本の新ルートを開拓。①ダンビアド南壁「ブレイユード」難度Vミックス、7時間。②ピーク11300イーストスパーク・ポイントKJ「コンチエルト」難度AI4+、M5+(中級だが、危険度RⅡ墜落すれば負傷する危険大)18時間30分で完登。かなりのプレッシャーの中での登攀。③ダンビアド東壁「ノクターン」難度WI4、AI5、M5、12時間で完登。垂直の氷壁と難しいミックス壁の連続だったが、速攻で1300mの東壁を突破、頂上に立った。④ピーク11300イーストスパーク3「ソナタ」難度WI4、M4、10時間。なお、審査委員長と受賞者発表は萩原浩司が務めた。

(萩原浩司)

Report

支部登山指導者講習会開催さる

支部事業委員会委員長 宮崎紘一

支部事業委員会主催による、支部山行や登山教室の指導者育成を目的とした指導者講習会が2回にわたり開催された。

第1回は9月13日、JACルームで5支部14名の講習生を迎えて開かれた。溝田康史弁護士による「登山におけるリーダーの法的責任」と題して、民事責任と刑事責任があること、リーダー形態による責任の度合いの差を山岳会山行、仲間同士の登山、ツアー登山やガイド登山・講習会・研修会、大学山岳部の別に解説いただいた。引率登山と自主登山の違いが重要という指摘があり、登山は危険を承知の上で行なうべきものであるが、免責同意書の効力は万能ではない、など実例を引いての講演であった。続いて味岡進JAC遭難対策委員による「失敗しない登山計画の立て方」の講演は、東京・奥多摩地区での山岳救助隊長の経験に基づいた話を交えて、登山計画立案の要点を解説された。2つの講演とも活発な質疑応答が交された。

第2回は、5支部8名の講習生

を迎えて長野県小諸市の「安藤百福センター」で9月27日～28日の1泊2日で開催された。初日は宮崎茂男・長野県警察山岳遭難救助隊長による「長野県の山岳遭難の実情」の講演予定であったが、御嶽山の噴火による緊急出勤のためキャンセルとなり、急遽、黒沢徹ガイドが代理講演を行なった。黒沢ガイドには「リーダーの安全管理」と「読図」の2部構成でお話いただき、間に野口いづみJAC・日本登山医学会理事による「山での救急医療」の講演を挟んだ。野口講師による、ご自身の豊富な山登りで経験した事例を基にした講演は、医療経験のない者にとってもわかりやすく、実用的な解説であった。

黒沢ガイドは、山登りの考え方の山登りへの取り組み方など、登山の本質を踏まえての安全管理と読図の解説であった。熱心な講演と質疑応答に時間も忘れ、夕食の時間を遅らせるほどであった。

翌日は晴天に恵まれ、浅間山の

外輪山・黒斑山に登山、道々黒沢ガイドによる実技講習が行なわれた。豊富な経験に基づく指導は改めて教えられることが多かった。講習会としては寂しい参加者数であったが、実技講習としては参加者の顔が見える適当な人数であった。初めての試みであったが、来年度は今回の経験を踏まえ、改めて各支部の協力を仰いで、より実りある講習会として開催する予定である。

支部登山指導者講習会を受講して

福井支部 亀田友紀

昨今の登山ブームの一方で、遭難事故も多くなっているのが現状。山の魅力や登山の楽しみ方を伝えていくためにも、リーダーとして知っておくべきこと、必要な知識を身に付けたいと思い、今回の講習会に参加した。

初日の机上講義は、御嶽山の噴火により、長野県警の宮崎隊長の講義がキャンセルされるというハプニングがあったが、自然災害を目の当たりにし、より緊張感を持つてその後の講義を受けることができた。宮崎隊長に代わり黒沢ガイドからガイドの現場で感じたことや山の現状、トラブル事例など

を交えてお話しいただいた。山の楽しみ方が多様化し、プロとアマとの違いはあるものの、リーダーとなつて連れて行く立場としては共通するものがあり、また、自分自身も登山経験が浅いため、指導者としてだけではなく、一登山者として心得ておくべきことを見詰める直す良い機会となつた。

また、近年はツアー登山が増えているが、ガイドについていくだけの登山は視野が狭くなりがちで、足元ばかり見てしまい、気がついて迷うケースもあるという。すべてをガイド任せにするのではなく、ツアー登山であっても、参加者一人一人が自立した登山者であるという認識を持つてもらうことが大事なのではないかと思う。

一方、「読図」というと難しいイメージがあり、私自身も苦手意識があった。だが、今回の黒沢ガイドによる読図講習は、コンパスの使い方以前に地図から情報を読み取る方法を実践を交えて教えていただいた。簡単な略図を書くことで尾根か谷か、登りか下りか、急登なのか緩やかなのか、分岐やピークなど、コースタイム以外にもい

ろいろな情報が読み取れる。それを自分で略図にして書くことで、実際に登ったときにイメージがしやすく、分岐など注意する場所をあらかじめ知識として持つておくことが、遭難事故を防ぐ一つの対策になると感じた。

道迷い以外にも、転・滑落の原因として体力の低下や疲労によるものも考えられる。道具やウェアを揃えたり、ルート調べたりする前に、まずは自分の体のことを知ることが山での事故を未然に防ぐためにも大事なことであったと感じた。野口医師の救急医療講義によると、登山中に急変をもたらしやすい病気は、心疾患と脳卒中であるという。特に60歳を超えるとそのリスクは高まるため、既往症の確認など普段から自分の体のことを知っておくことは、自分の命を守ることになる。

2日目の黒斑山での実技は、基本的な山の歩き方、リーダーとして歩くためのポイントや注意点を教えていただいた。こまめに地図やコンパスで現在地を確認し、地図での表記と実際の登山道の状態を照らし合わせながら、読図の講習も兼ねて行なわれた。

リーダーとしてペース配分や足の運び方、ルートの選択、参加者の安全確認など、実際に受講生が交代で先頭を歩きながらその感覚を練習した。しかし、自分が先頭で歩いているときに分岐で標識を見落として、きちんと地図で確認もせず、人が流れている方へと進んでしまった結果、ルートを間違えてしまった。今回は実技練習だったため、所々でアドバイスをいただいたが、実際に自分がリーダーとして歩くときは、自分の判断次第で遭難事故になりかねないと改めて思った。

初めて目にした浅間山は、圧倒的な存在感と少し色づき始めた木々でとても美しい姿を見せてくれた。その一方で、振り返ると噴煙を上げている御嶽山を確認することができた。自然の楽しさと怖さは表裏一体。万全の対策をとっていても防ぎようのない自然災害もあれば、もしかしたら防げたかもしれない事故もある。山登りのゴールは頂上ではなく、無事帰ること。今回の講習会で学んだことを頭に置き、指導者、リーダーとして考え、備え、行動していけるようにしたい。

Report

第30回全国支部懇談会・埼玉大会報告

埼玉支部 副実行委員長 松本敏夫

第30回全国支部懇談会・埼玉大会は平成26年10月18日(土)～19日(日)、秩父市のナチュラルファームシティ農園ホテルおよび秩父周辺の山域で開催された。30回目の記念すべき全国支部懇談会が、支部創立50周年の埼玉支部主催で開催されたことは、支部活性化の成果としても意義深い。全国から26支部(本部を含む)199名の会友・会友が秩父に集合し、久々の再会を楽しみ、懇親を深めることができた。受付周辺では新井信太郎会

員や山口定男会員の写真展、アルパインスケッチクラブの絵画展、自然保護委員会や陸地測量部の活動資料が展示され、多くの参加者が足を止め、話し合いの輪ができていた。

開始式では大久保春美埼玉支部長による開会の挨拶に続き、公務が重なったため急遽欠席となった久喜邦康秩父市長からの、全国支部懇談会が盛大に開催されたことを祝すメッセージが代読された。来賓の紹介では、秩父市役所産業観光部主席主幹の宮城敏氏、秩父まるとジオパーク推進協議会上席推進員の吉田健一氏、埼玉県警察山岳救助隊副隊長の飯田雅彦氏、日本山岳会・森武昭会長および節田重節副会長が壇上で紹介された。その後、講演会となった。

講演(1)では、「埼玉県の山岳遭難事例と安全対策」と題し、山岳救助隊の飯田氏から埼玉県内での山岳遭難状況やその特徴、埼玉と群馬の県境に位置する赤岩岳での遭難者救助活動がDVDによる臨



大いに盛り上がった懇親会



両神山コース・白井差登山口にて

場感のある映像で紹介された。最後に、「遭難救助活動で思うこと」と題し、登山届の提出、セルフレスキューの実践、山ガール・山ボーイなど未組織登山者の山岳会への勧誘などの必要性が提示され、ユーモア溢れる講演で思わず聞き入ってしまうほど。講演(2)では、「日本地質学発祥の地、秩父からの報告」と題し、秩父まるごとジオパーク推進協議会の吉田氏により、風土や歴史に基づく秩父の多様な自然や両神山・武甲山、琴平丘陵と地質との関連など興味深い報告があった。武田信玄に攻め込まれ、平賀源内が訪れた秩父盆地の魅力が一段と深まった講演であった。

懇親会では、埼玉支部の野村孝義副支部長から主催者を代表して挨拶が行なわれたのち、森武昭会長から来賓の挨拶をいただいた。秩父の地酒「秩父錦」による鏡割り、支部参加者代表として関西支部の重廣恒夫支部長による乾杯で懇親となった。秩父で活動しているグルーポ・パンカリータスによる南米地方のフォルクロレの演奏や秩父夜祭で演奏される秩父屋台ばやしの迫力で一気に会場が盛り上がる。円卓を囲む懇親会では会員間の交流が一層深められ、多数の支部から差し入れられた自慢の地酒もいつしか底をつく状況であった。最後に、次回の平成27年度全国支部懇談会を主催する四国支部の尾野益大支部長の挨拶と一本締めで中締めとなった。

19日は「秩父晴れ」というべき好天に恵まれ、ホテルの窓越しに両神山をはじめ城峰山、和名倉山など秩父の山々が見渡せた。登山は3コースに分かれ、時間差をつけてホテルをマイクロバスや徒歩で出発した。

両神山コース(61名)は日本百名山の一つであり、埼玉県内で最も人気の高い両神山にほとんどクサ

り場なしで登れる白井差ルートである。登山口から5班に分かれ、間隔を開けて出発する。昇竜ノ滝を越え、オオドリ河原、水晶坂、ブナ坂などの手入れの行き届いた樹林帯の登山道を登り、真つ青な秋空の下、全員元気に両神山山頂に着いた。秋の行楽シーズンと好天が重なり登山者も多く、山頂での写真撮影も早々に、往路と同一ルートを下山した。

武甲山コース(63名)は一の鳥居がある生川の武甲山登山口から5班に分かれて出発した。丁目石に導かれて表参道を登り、水場である不動ノ滝、五十二丁目の御嶽神社から武甲山展望台に出て、両神山や城峰山など秩父の山々の見事な展望を楽しむ。石灰岩採掘で山肌が削り取られた秩父市街からの山容とは異なり、歴史と信仰の登山道は良く保存・整備されている。帰路は御嶽神社から長者屋敷ノ頭を経て急斜面を慎重に下ると林道で、秩父札所二十八番・橋立堂に出る。自前のマイクロバスで参加した宮崎支部の参加者と別れ、秩父鉄道浦山口駅まで歩き、電車で西武秩父駅に元気な笑顔で集合した。

琴平丘陵コース(42名)は4班に分かれ、ホテルから「ふるさと歩道」をゆつくりとしたペースでたどり、秩父札所十一番・常楽寺に下る。国道299号を渡り、河岸段丘に広がる羊山丘陵に登ると秩父市街が眼下に広がり、武甲山、両神山、城峰山などが遠望できた。羊山公園では武甲山資料館や牧水ノ滝に立ち寄り、羊牧場や芝桜の丘周辺で武甲山を仰ぎながら昼食となる。十月桜に送られて琴平ハイキングコースを南下し、馬頭尊の道標がある戸坂峠から足場の悪い急坂を旧武甲山登山口に下る。甲午歳総綱帳で賑わう秩父札所十二番・野坂寺を経由し、西武秩父駅に着いた。

豊かな自然環境に恵まれ、悠久の歴史と独特の伝統文化を育んだ秩父で開催された全国支部懇談会に、北海道から九州まで全国の会員・会友の皆様に参加いただき感謝申し上げます。埼玉支部創立5年目にこのような全国大会を主催できましたことは、実行委員62名が各々の役割を分担し、大会に向けて支部の団結を強め、経験豊かな他支部の皆様と交流を深め、貴重な体験を共有できましたことは、今後の支部活動にも得難い経験になったものと感謝しております。

中村保名誉会員、UIA A名誉会員となる

10月18日、米国アリゾナ州フラグ
スタッフUIAA総会の報告

小野寺齊

すでにご承知のとおり中村保氏は本会の名誉会員であるばかりでなく、アルパインクラブをはじめ欧米の主な山岳会の名誉会員であり、2008年には英国王立地学協会からバスクメダルも授与されている。これに先立ち2007年には、UIAA(国際山岳連盟)から世界の登山界に貢献したということで表彰もされているが、今回は名誉会員として推薦する案が総会にて採択され、満場一致で可決された。



ビル・パトナム氏と筆者。中村氏が来年出版予定の本とともに

例年、UIAA総会は理事会を同時開催として10月に行なわれる。本年はアリゾナ州フラグスタッフにて開催された。筆者は日本山岳協会の神崎会長が国体出席のため、代わりに代表として総会に出席した。

中村氏の名誉会員への推薦はアメリカ山岳会の元会長で、UIAAの元副会長であるビル・パトナム氏と、ネパール山岳協会の元・現会長であるアンツェリン氏の事前の提案である。今回は総会議題の一つとして中村氏が名誉会員として妥当かどうかの採択・議決を行なったが、その報告である。総会全体の報告は「登山月報548号」(日山協発行)を参照されたい。報告に先立ち、フラグスタッフと日本との関係を簡単に紹介しておきたい。パシバル・ローエルは19世紀にボストンに生まれ、1894年にここフラグスタッフにローエル天文台を創設、火星人の存在を予言、冥王星の存在を予知したことでその名が知られている。この天文台創設以前の10年間は日本に滞在、有名な所では能登半島や北アールプスにまで足を延ばしており、能登半島旅行記もある。さて、前述のパトナム氏である

が、正式にはウィリアム(ビル)・ローエル・パトナムと言ひ、パシバルの甥の息子にあたり、1992年にUIAA総会で松本に來た折にお嬢さんや丹部氏とともに能登半島を訪れている。

このような縁もあり、著者は総会においてパトナム氏、アンツェリン氏とともに紹介され、お二人の後にパワーポイントを使用して中村氏の業績を改めて発表させていただく機会を得た。この名誉会員については、2011年総会において投票総数の90%を確保しなくてはならないと決定された。その直後に名誉会員に推薦された方が、評決時に89%(筆者の計算)で落選してしまったのである。翌2012年、同じ方が自国の多くの役員と出席、90%を75%に動議し、その案が可決され、結果として名誉会員に決定した。2013年は該当者がおらず、本年の中村氏の推薦となったわけである。

今回の議決にあたり、議長が賛成票を見て大多数と発表、数は数えなかったが満場一致と筆者は解釈している。日本人では斎藤一男氏に続いて2人目であるが、貢献分野は大きく異なると思われる。

中村氏は『ヒマラヤの東』に代表されるように多くの業績があり、敢えて述べるまでもなく、国内外の評価はすでに知られたところである。氏の評価が海外からの逆輸入であるかどうかはさておき、今回の授賞も含めて、国とか組織に無関係に、その人の実績で判断される世界が数多くあるということはすでに周知されてきている。これからの多くの、特に若い人の発展を望みたいし、その芽も出てきているように思う。

(公益社団法人・日本山岳協会常務理事、JAC会員番号111110)

追

OBITUARY

悼

秦野一彦先生を偲ぶ

関口興洋

平成26年9月24日の「日本山岳会だより」の計報欄で、元北九州支部長の秦野一彦先生が、9月10日に89歳で逝去されたとの報に接した。突然のニュースで、青天の霹靂であった。昨年末、支部忘年の集いに出席していただきたくお誘いの電話をかけたのが最後の会話となった。

秦野先生は2002年9月8日



秦野一彦(はたの・かずひこ) 会員No.4325

1925 (大正14)年1月21日 愛知県に生まれる。

1953 (昭和28)年 京都薬科大学卒。

1955 (昭和30)年10月 日本山岳会初回入会。

1996 (平成8)年9月 日本山岳会復活入会。北九州支部長在籍期間：2002～06年 評議員在籍期間：2007～10年

2014 (平成26)年9月10日 逝去(享年89)

に開催された臨時総会で、北九州支部の第2代支部長に選任され、10月より新体制がスタートした。私もそのときから委員の一人として支部運営に関わることになった。支部長就任にあたって述べられた「山田二郎元会長の『生命を大切に、仲間を大切に、自然を大切に』という言葉に感銘し、この3つの基本原則を踏まえて新しい陣容で体制を整え、明るく楽しい和気藹々の支部にしたいと願っております」とのご挨拶が、その後の支部運営

に如実に反映されたのではなからうか。

2005年、日本山岳会創立100周年記念事業の目玉である中央分水嶺踏査が、創立間もない北九州支部にとり、果たして実行できるのか大いに疑問視された。特に担当地域の大半が山口県の分水嶺であり、北九州の会員にはなじみの薄い所であった。そのような状況下で、支部長は下関山岳会の会長にお会いし、事業達成のための助言をいただくなど率先して行動されたことが印象深い。

山口県と島根県の県境に位置する仏峠から2004年4月11日にスタートした分水嶺踏査も、会員の熱心な取り組みが実を結び2005年5月8日、いよいよ最後の区間である貫山～平尾台の踏査を残すだけとなり、当日、秦野支部長以下多数の会員が参加され、220kmに及ぶ中央分水嶺踏査が完結した。午後から平尾台のキャンプ場で支部長出席の下、完結記念の野外パーティを行ない、60日に及ぶ踏査が無事終了したことを祝った。

この中央分水嶺踏査をやり遂げたことが支部会員の団結と絆を深め、その後の支部活動に大いに寄

与したことを秦野支部長は最も喜ばれていた。

また、2005年の関西支部創立70周年記念の集いが高野山で開かれたときには、新門司から大阪南港まで夜行便のフェリーに乗り、2等船室で参加メンバーと車座になつてお酒を酌み交わされるなど、ざつくばらんなお人柄が滲み出たお付き合いをいただいたことなど思い出は尽きない。普段は寡黙な高潔の士であつたが、お酒が大好きで、酒席では学生時代の登山にまつわる武勇伝などをときどき語つていたことが懐かしく思い出される。

秦野先生は「漢方薬草」の権威で、1977 (昭和52)年、「セリ科植物の細胞遺伝学的研究」で九州大学より薬学博士の学位を授与された学者でもあり、九州大学薬学部講師として、漢方薬の本場である中国からの留学生の研究指導をされていた。高齢になり辞めたいと大学に申し出ているが、なかなか暇を出してもらえない、とぼやかれていたこともあった。

突然のお別れで淋しい限りですが、北九州支部の発展にご尽力いただいたことに感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。



大西 保(おおいし・たもつ) 会員No.11919

1942年 大阪市天王寺区で5人兄弟の次男として生まれる。近畿大学附属高校、関西大学経済学部卒。
1966年 大阪山の会の「北米縦断登山隊」に参加し、ロブソン南壁、アシニボイン南西壁、レーニア南面、ティートン東稜、ホイットニー南壁などのほかヨセミテやメキシコの日々を登る。
1980年 ラムドンゴ、バルチャモなど。金沢健、塩田純一と出会い、カトマンズクラブを結成。
1983年 台湾・玉山、南梓仙南侯初週行。
1984年 ロブジェ・ウェスト初登頂。
1985年 韓国・インスポン、ソニンボンなどでロッククライミング。これ以降、回数を重ねる。
1987～89年 カトマンズクラブでガッシャブルムI峰、ダウラギリI峰、エベレストへ。
1994年 ウルキンマン北峰初登攀。
1997年 カンティ・ヒマールの6000m峰2座初登頂。
1998年 中国・長白山。
1999年 ドルポ国境の6つの峠の踏査、6023m峰初登頂。

稀代の探検登山家
大西 保さん 重廣恒夫

ブログ「台風日記」やホームページで、ネパール・ヒマラヤの情報を世界に発信し続けた大西保さんが、9月20日、72歳で亡くなった。東チベット研究の中村保さんと並ぶ、西ネパール研究の第一人者を買った悲しみは大きい。

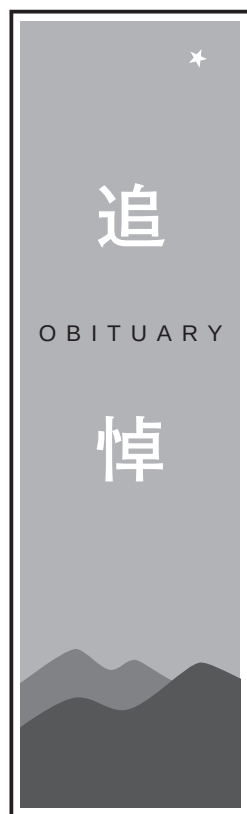
大西さんの山登りは、中学生のころ、兄弟で行った大阪近郊の箕面の山でのキャンプに端を発する。その後、日本アルプスにも足を運ぶようになり、高校生のときに、ヒマラヤ研究家・吉永定雄さん(D・スネルグローヴの『ヒマラヤ巡礼』などの翻訳家)の在籍していた「大阪山の会」に入会する。

1966年の7ヶ月にも及ぶ北米大陸縦断登山隊に参加してからの大西さんは、吉永さんや阿部和行さん、水谷弘治さんたちの影響もあってネパール・ヒマラヤの虜になっていった。20歳台で会社を創業し、社会人生活を営みながら、その軸足は徐々にヒマラヤ研究へと移っていく。67年、大阪山の会が行なった西ネパール遠征で、眼前の大パノラマに魅せられ、その後、国境沿いの山々を極西北のナラカンカールまで跋涉。80年からはほぼ毎年、西ネパールに足を運ぶようになる。近年は東ネパールにも足を運び、グレート・ヒマラヤ・トレイルも歩き通したネパール訪問は、43年間で70回近くに及ぶ。

99、2003年には西北ネパールの禁断の地「ドルポ」に入城し、1900(明治33)年に日本人で初めてチベットに入国した河口慧海が、どの峠を越えたのか調査を行なった。04年には関西支部が70周年記念事業で派遣した「西チベット学術登山隊」の登山隊長として、若い隊員たちの先頭に立ってパチユムハム峰(6529m)北稜初登頂と、ギャンゾンカン(6123m)南東壁初登頂を成功させた。学術隊(河口慧海足跡隊)は東海支部の和田豊司さんと広島支部の清水正弘さんが担当し、チベット側から慧海が入蔵した峠の解明に当たった。直後に慧海直筆の日記(明治33年分)が見つかったこともあって、「慧海研究プロジェクト」が立ち上

がり、「謎の越境ルート解明」がなされたことは周知のとおりである。大西さんもメンバーの一人であった。ライフワークとしていたネパール・チベット国境地域の山座同定は、膨大な和書・洋書・地図の収集と渉猟がその源になっている。また、いち早くグーグル・アースなどの画像データを活用した同定の精度の高さは、ネパール政府の関係部局も一目置いていた。

大西さんは、ネパールだけではなく週末には韓国の岩場に通い、時には台湾の渓を遡行するなどして、古くから異国の岳友も多かった。加えてお酒が好きだった大西さん宅には、梁山泊のごとく老若男女を問わず多くの岳人が出入りし、その知見に目を輝かし、刺激を受けてヒマラヤへと旅立っていった。そろそろネパール・ヒマラヤ踏査の集大成をしようと言っていた大西さんは、「頑張つて静養します!では、では…」とブログに残して逝ってしまった。関西支部設立80周年記念事業の一環として行なう予定の、東ネパールの未踏峰登山の隊長をお願いしていただけに残念でならない。心からご冥福をお祈りします。



【さんけん通信】 山研の十年を振り返って 内野慎一



家族とともに

「今シーズンで最後」と踏ん切りをつけて、春からお礼とお別れを申しているうちに閉所の時期になりました。ここ10年の最多の利用をいただき、皆さまとお目にかかれて嬉しかったです。そして誌面をいただきまして、お会いできなかった方々へのご挨拶と、管理人の仕事を通じて気づいたことを書かせていただきます。

勤務を始めたとき私たちは30代半ばで1歳の娘と家族3人での住込みでした。そのうち娘は見よう見まねで、到着された宿泊者を部屋へ案内したがるようになりました。やがてパスターミナルまで新聞を受け取りに行くようになったのには大いに助かりました。今では新聞取りは次女に引き継がれ、つい先日は三女が玄関でスリッパを揃えていました。

小ぢんまりした山研ならではでしょう、食堂や台所で自然と会話が生まれ利用者と親しくさせていただけました。たびたび利用される方の中には、子どもの成長を見守ってくださった方や、家族ぐるみのお付き合いになった方もいます。

やはり、皆さまとの心の交流が今まで続けてこられた何よりの原動力でした。

そして、山研委員と汗をかいいた一体感も忘れられません。みぞれ交じりの雨の笹やぶで水のパイプを「せーのっ」と持ち上げたり、沢でしぶきを浴びながら取水口を復旧したり、あるいは委員会主催の行事で大鍋からずらりと並んだ皿に盛り付けたり。普段は離れていても私たちを支えていただきました。

また、日ごろは上高地の人の輪に加わらせていただきました。上高地は、もはや地名にはとどまらず登山者や観光客にとってのブランドでしょう。そんな華やかなイメージの裏側には、施設ごとの、さらに地域一体となつての泥臭い取り組みがあることを知りました。開山祭の運営や一斉清掃、消防隊、遊歩道整備、そのほか総出での作業の一員として参加したり、道端で挨拶を交わしたりしながら様々なことを教わりましたし、ここで安心して暮らすことができました。人との関わりと、もう一つの元気の源は上高地の自然でした。

最近外へ出ると冷たい空気にいい匂いが漂っています。カツラやサクラの葉などの匂いでしょうか。ここで暮らした幸せと、離れる寂しさをしみじみとかみしめています。

蛇口をひねれば水が出るように

その一方で、人の力など到底及ばない自然の猛威も見せつけられました。2年目の豪雨時の土石流(会報2006年8月、9月号さんけん通信)の後、いつもは「おいしい善六沢の水」(会報08年7月号)が濁ってしまうことが多くなりました(後述、会報09年10月号レポート)。

昨年(2013年)8月上旬に、泥色に濁ったまま10日間回復せず、取入れできなかったときは厳しかったです。白樺荘や西糸屋で水を分けていただき、雨水でトイレを流し、柴山委員長に紙食器を急送してもらい、外来入浴に出かけてもらうなどの代替策を総動員しました。この間約60名の宿泊者のご協力をい

ただいて乗り切れました。

軽い濁りはたびたびありましたが、利用者には普段どおり水を使っていたいただいて、その裏側で1時間ごとに濁り具合を見て断続的に取水するなど、実はジリジリしていたこともありました。

2011年の釜トンネルの上と下での土石流のときは、道路も電気も電話も携帯もネットも寸断されました。

町では水や電気などインフラは整備されていて当たり前。一方、山研では開所時に取水を整備してはじめて蛇口から水が出ます。また、以前に働いていた山小屋ではもちろん水も電気も自前でした。このようなインフラを整備する経験のおかげで、断水や停電のときでもお手上げとはならず、なんとかなると思えたのかもかもしれません。

やってみたらできた、つくる喜び

「山小屋ではなんでもやるんだから」以前働いたとき初日にオーナーから言われたことを覚えています。

山の上よりずっと便利な上高地ですが、自分たちの手を動かす範囲が広いところは似ています。ぴったりのモノがなくても、里まで買い物に下ることもままなりませんから、まずはあるモノで工夫して間に合わせようとします。どこか壊れても、業者に頼む前に自分でやってみます。それは予算を大事にしたい懐都合にも合致します。

山小屋の先輩方や山研委員に見せてもらったワザや知恵が活きました。工具やツルハシを手にするたびに感謝しています。とはいえ、素人仕事を隠せない仕上がりをを見ると情けなくなります。むしろつくることの喜びに気づかされ、それなりにできた、と前を向くことにしています。

ちょっと話を広げますが、今の暮らしは衣食住も娯楽も、つくることは他人に任せておいて、選んで買うことと、選ぶために情報を集めることに重心が偏っているように感じます。

そんな中で、登山の楽しみは自分の体と五感とでつくっている、テント泊山行はザックひとつで最低限の暮らしをつくらなければならないと思います。山好きの方はそもそも「つくること」が上手で、楽しむことが上手な人が多いのではないのでしょうか。

ときにはそんなことを考えながら、皆さまの山へ来た喜びの笑顔に日々接することができる管理人の仕事。私たちににとってかけがえのない10年間でした。本当にありがとうございます。

《付・最近の善六沢水源の状況》

2006年7月 上高地で記録的豪雨。土石流発生し取水口流失。2週間断水する(以降、雪融けや雨で濁りやすくなる)。

2009年 雨水を貯めてホースでトイレへ(簡易水洗)。

2010年5月 土砂を巻き込んだ雪崩により2週間断水。

2010年7月 土石流が取水口の数十mまで迫る(1週間断水)。

2010～14年 各年、梅雨末期に取水口トラブル。管理人では対応できず、委員が現地入りすることもありたびあった。

2013年8月 豪雨による濁りが収まらず10日間断水。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

集云委員会

「北ア・裏銀座」笠ヶ岳縦走」 に参加して

9月4日、信濃大町駅に着くと雨。七倉山荘で9人のメンバーと合流。私は登山を始めて3年、入会させていただいて約1年。登山は初心者だ。北アルプス裏銀座「笠ヶ岳」は初めてのロング縦走で不安だった。60代、70代の中で4代の私は正直ホッとした。体力的について行けそうかな。ところがなんと、北海道支部の4人は前日まで白馬岳「鹿島槍ヶ岳」を縦走してきたとのこと。健脚揃い。さすが日本山岳会だ。

9月5日、生憎の霧雨で高瀬ダムから雨衣を着ての出発。ほどなく「裏銀座登山口」と書かれた黄色い道標を発見。その隣には「12」から始まる案内板がある。なるほど烏帽子小屋までの目安番号らしい。

ここからが北アルプス三大急登と名高いブナ立尾根だ。木の根が這う道を手掛かり足掛かりにして急斜面を上る。樹林の中で蒸し暑い。気が付けば「4」に到着。高度が上がるにつれ霧雨が小雨に変わり、休憩すると体が冷えてくる。残り3、2、1と順調に通過、烏帽子小屋到着の0でブナ立尾根を登り切った。ゆつくり登ってきたのと番号板のおかげで思ったよりきつくなかった。7名で烏帽子岳ピストン。

9月6日、ご来光が見える小屋近くの展望台へ行く。餓鬼岳方面がオレンジ色に染まり朝日が昇り始めた。今日は歩程10時間の長丁場。2年前初めて表銀座を歩いたときから裏銀座に憧れていた。前半は比較的アップダウンの少ない稜線歩き。三ツ岳を巻きお花畑ルート歩き野口五郎岳へ。はるか向こうに最終目的地の笠ヶ岳の山



笠ヶ岳山頂での記念撮影

頂が見えた。東沢乗越からは赤茶けた岩稜をアップダウンしながら水晶小屋。さらに水晶岳へ。日本百名山に名を連ねているだけあって雲ノ平や黒部五郎岳が間近に見える雄大だ。

ワリモ北分岐。朝出発してからすでに9時間以上。鷲羽岳に登らず巻いて三俣山荘を目指すか相談。皆さん行きたそう。天気は安定しているしゆつくり行けば登頂できるとCLは判断。朝出発してから10時間30分。ようやく全員で鷲羽岳を踏むことができた。うれしくて皆でガッツリ握手。槍ヶ岳がすぐそこに見えた。日没間近にようやく三俣山荘に到着。間もなく雨が降り始めた。

9月7日、午前3時、窓を叩く雨音で目が覚める。山荘前はガス

で真っ白。今日の歩程は8時間45分。ハイマツの稜線を進み三俣蓮華岳、双六岳へ。残念ながら山頂はガス。緩やかな道を下り双六小屋に到着するころには靑空が見えていた。稜線に咲くお花畑を楽しみながら進む。突然現れたライチョウが見事に飛んだ。

秩父平から秩父岩を回り込むようにきつい岩場を登り切り、左へ進むと緩やかな稜線歩きで気持ちいい。雲の切れ間から笠ヶ岳が見え隠れしている。突然、後ろの方から「ブロッケン現象だ!」の声が聞こえた。これを見ると良いことがあるとか。5時5分、笠ヶ岳山荘に到着。振り返ると夕陽を浴びる槍・穂高連峰の絶景が見えた。夕食後、CLの許可を得てひとり山頂へ。日没直前、笠ヶ岳登頂。

9月8日、朝、身支度をして外に目をやると……濃オレンジ色に染まる槍・穂高が映し出されていた。美し過ぎる景色にシャッターを何度も押す。ここまで歩いてきたご褒美をいただいた。朝食後最後の一座、笠ヶ岳山頂へ。山頂の祠でCLが祈願。その横で私はちやっかり無銭祈願。メンバー全員で旗を囲んでの登頂記念撮影をし

てクライマックス。名残惜しいが下山開始。抜戸岳手前を右に進み笠新道の岩場を下り、岩稜のジグザグ急坂で高度を下げながら杓子平で小休止。さらに樹林帯の急坂にジグザグを繰り返しながら新穂高温泉にたどり着き安堵した。

北アルプス裏銀座へ笠ヶ岳縦走完歩。たくさんのことを学ばせていただき、充実した4泊5日の山行に感謝いたします。

(埼玉支部・田中摩利子)

資料映像委員会

茨木猪之吉の肉筆絵はがき寄贈さる

関塚貞亨会員より、茨木猪之吉の肉筆絵はがき8枚の寄贈がありました。資産コード入力作業を終え、資料として当会に保管しましたことをご報告いたします。

8枚のはがきについては『山岳』第109年、257頁に詳しいのでご一読ください。

(資料映像委員会)



支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

北海道支部

ロシア連邦沿海地方 オーブラチナヤ山 生態系観察登山を実施

北海道支部は2015年の創立50周年記念事業を前にして本年プレ海外登山を行なった。ロシア連邦沿海地方のシホテアリニ山脈のオーブラチナヤ山(1854m)で、主にこの地方の生態系観察登山を行ないながら2014年8月3日14時、日本時間正午に支部長を含む会員13名が登頂を果たした。

シホテアリニ山脈は多様な生態



オーブラチナヤ山のハイマツ帯を行く

系の豊かなことから世界自然遺産に登録されている地域であり、特にオーブラチナヤ山周辺はゾーフティグラ(虎の呼び声)国立公園に指定され、動植物の生態系を守るための特別保護区に指定され、入域が厳しく制限されている。また、北海道とは日本海を隔てて隣接する地域であり、オホーツク海や知床半島の自然環境・生態系が大きな影響を受けていることからこの地方を選んだ。

日本から韓国経由でロシア連邦に入国。ウラジオストクから車でアルセーニエフに至り、峠を越えてアムール川四大支流のひとつであるウスリー川の上流に入り、小さな集落のある山村、アルヒーポルカの鄙びたロッジをベースとし活動した。

観察登山はウスリー川上流へダート道を進み、自然保護区のチェックポストで許可を得てから奥へ

と入域。鬱蒼とした広葉樹林帯から針葉樹林へと変化する中を支流に入った。泥沼状の悪路を登り詰め、標高1000m地点の小さな駐車スペースで下車。ここから針葉樹に覆われた尾根をたどり、樹木と花々を観察しながら登山を開始。途中でアムール虎の糞を見つけて一同緊張する場面があり、さらに数ヶ所で熊の糞を発見。標高1400mが森林限界となり、ハイマツも現れ岩ガレが展開し、前衛のピークを回り込むと、ようやくオーブラチナヤ山が見えてきた。いったんコルに下がり、最後は岩石が累々と重なる急な斜面を登って1854mの山頂に立った。

「雲の山」という意味を実感しながら湧き上がっている雲の合間に南部シホテアリニ山脈の広大な山々を眺望することができ、全員感激の握手を交わした。

登山中は北海道大学地球環境科学研究院・低温科学研究所の3名の先生から、周水地形や森林火災跡の説明を受け、高山植物の分布や森林の植生分布の生態系を観察調査した。下山後、ウスリー川源流で釣りを試み、キャッチ&リリースしながら川魚の分布や藻類の

生育を観察するほか、集落の保育園や学校を訪問し、農場や養蜂場、建設中の住宅を視察するなど過疎化が進む地域の住民の方々とも交流ができた。北海道とは自然条件の異なった下で貴重な生態系を展開する野生のロシア・シホテアリニ山脈を体験する機会を得たことは、当初計画したとおり意義深く大きな成果を得ることができた。

ウスリー川がアムール川の本流へと流れ落ち、森林と河川の栄養分が流水によって北海道オホーツク海や知床の海に恵まれた水産資源をもたらす「森は海の恋人」という地球規模的な自然循環システムの大切さも学習ができ、自然生態系の保全面において北海道とロシア極東地域との連携が不可欠であることを強く実感することとなった。

北海道支部ならではの取り組みであるこのたびの生態系観察登山の成功は、支部創立50周年記念事業に計画している「カムチャツカ半島の生態系観察登山」にも引き継がれていくものとの確信を得て帰国した。

(京極紘二)

東九州支部

九重・山の安全を祈る日の集い

九重連山のほぼ中央にある九州本土最高峰の中岳(1791m)から、南西方向に直線距離で400mほど離れて、中間にある御池を挟んで対峙する丘の上に遭難者慰霊の石碑がある。しかし、それが一般登山道から離れているせいもあり、その存在を知っているのは、九重山を訪れる人の中でも数少ない。この石碑は今を去る84年前の1930(昭和5年)8月、記録に残るものの中では九重山で初めての遭難事故の犠牲となった2人の若者を慰霊するために遺族が建立したものである。

長年の風雨に耐えて石碑は残っていたものの、土台部分の風化でいつのころから転倒したままになっていた。6年前、我が支部会員とその仲間たちが機材などを担



慰霊の石碑

ぎ上げて、転倒したままの巨大な石碑を起こし、土台部分を修復する作業を3日がかりで行なった。それを記念して平成20年8月8日、支部月例山行を兼ねて支部会員や一般参加者も誘ってそこに集い、法華院温泉山荘の社長であり、法華院白水寺第26代院主でもある弘藏岳久氏の読経で、80年前の2人の若者の慰霊を行なったのが始まりである。

支部は翌年の定期総会でこの行事を「九重・山の安全を祈る日の集い」として、一般登山者にも参加を呼びかけて毎年8月第1日曜日に、法華院白水寺と共催のもと、遭難碑前で慰霊と山の安全を祈る祭を行なうことを決めた。

しかしこの慰霊祭、平成20年の最初の慰霊のときにも、その開始直前に風雨が激しくなつて急遽、読経の場所を御池の石室避難小屋に移して行なつて以来、4年続けて雨の天気で、慰霊碑前では実施できずに避難小屋で実施している。そして5回目の今年（山の安全を祈る集いとしては4回目）も折からの台風12号の接近で、朝から雨と霧と風である。遭難碑のある山頂付近は荒れ模様が予想されるた

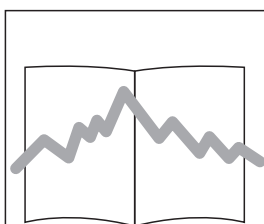
め、弘藏氏と電話で連絡を取り合つて、急遽、会場を法華院に変更して実施することとなった。

予定時刻に牧ノ戸峠登山口に集まったメンバー21名は、大曲の登山口に移動し諏蛾守越経由で入山することとなった。途中、北千里ヶ浜を通過するときに昭和37年の遭難（1月の北千里ヶ浜で2パーティ9名が吹雪に巻かれ、7名が死亡、2名が凍傷）慰霊碑に立ち寄つて頭をたれた。一時は世間を騒然とさせた、この九州最大の山の遭難事故も次第に人々の記憶から遠ざかり、そこに遭難慰霊碑があることすら知らないハイカーがほとんどだ。

一行は北千里ヶ浜から法華院温泉へと下り、山荘裏の対岸にある観音堂に全員が集結した。そして弘藏院主の読経のもと、参加者全員が焼香して遭難者の慰霊を行なうとともに山の安全を祈つた。

これは何かの因縁ではなからうか……。そんなことを互いに話しながら下山したが、かくして「九重・山の安全を祈る集い」の行事は今年も、遭難者とその遺族の涙を感じさせるような天気であった。

（飯田勝之）



図書紹介

深田久弥著

『名もなき山へ』

『愉しき山談義』

『深田久弥対話集』



2014年9月
幻戯書房刊
四六判 320頁
定価 2600円＋税



2014年10月
幻戯書房刊
四六判 288頁
定価 2600円＋税

名著『日本百名山』『ヒマラヤの高峰』の著者、深田久弥（1903—1971）の未収録の随筆、対話を集めた単行本が、幻戯書房から相次いで出版された。『深田久弥・山の文学全集』や『深田久弥 山の文庫』には載っていない貴重なもの

のが網羅され、深田久弥の自然観、登山観が鮮明に浮かび上がってくる。

『名もなき山へ』

未収録の73編の随筆が、7部に分けて紹介され、通読すると、ひたすら山を愛した「温かく大きな人」深田久弥が現れてくる。

最初の「山へのいざない」では、高村光太郎の『智恵子抄』や万葉集を挙げながら、日本文化の根底に山々があることを示す。「私の名山」は、昭和15年に発表した「百名山（20座で連載終了）から始まる。同じ山が何度か登場するが、執筆した年代によって表現が違って興味深い。山の品格、名山の条件、山を見る視点など、『日本百名山』へと続く深田の思索の過程が浮かぶ。「静かな山旅」では、達人の山歩きに同行しているような、ゆつたり

した気分が味わえる。出会う人もまばらな「名もなき山」の奥深さを綴る深田久弥に学ぶことは多い。「ふるさと今昔」「東京暮らし」「登山の周辺」と続き、「未知なる土地へ」では、ヒマラヤ研究者、実践者としての深田久弥の探検、冒険への熱意が伝わってくる。

巻末の雁部貞夫氏の解説「読み、歩き、書いた」―深田久弥・山の生涯―は、深田久弥を理解する上で、大きな手助けになろう。

『愉しき山談義』

収録されている対談は、日本隊がマナスルに初登頂した1956年から深田久弥が亡くなる前年の1970年までの12編。60年近い昔の対談もあり、登山を取り巻く時代の流れを感じながら、山談義を愉しめる。Ⅰ部には8編、国内の登山状況などが多い。Ⅱ部には5編、深田が参加した1958年のヒマラヤ遠征に始まり、探検や冒険、海外の話題が中心になっている。対談相手は様々で、登山家、作家、学者など幅広く、思いがけない人もいる。

「御時間拝借」で本格的な山岳小説の執筆を勧められた深田は、小

説は人間の葛藤や恋愛の記録なので、限られた空間での登山では「困難な仕事でしょう」と答えている。

「ジュガル・ヒマール行をめぐっては、出発前の対談。作家、写真家、画家、医師からなる小さな隊だが、誰でもヒマラヤ登山が可能と示した功績は大きかった。続く「新春・ヒマラヤ登山の話」は帰国後の対談で、ネパールの様子には今昔の思いがする。松方三郎との対談では、深田らしい視点で、「文化が一番発達した形が平和だとすれば、あそこ(カトマンズ)はいちばん文化的な町だと思う」と語っている。

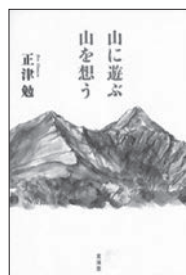
新田次郎との対談は、山岳小説への言及はないが、冒険の精神と文学を語り合い、読み応えがある。加藤泰安とは達人同士の冒険論がかみ合い、深田は楽しそうに「山登りは放蕩ですよ」と加藤の持論に同意する。

巻末の大森久雄氏の解説「深田久弥とその世界」も秀逸。文字からは伝わらない北陸なまりの深田の言葉つかいに触れるなど、深田久弥の世界へ導いてくれる。

(永田秀樹)

『山に遊ぶ 山を想う』

正津 勉 著



2014年9月
茗溪堂 288頁
四六判 1800円＋税
定価

著者の正津勉氏は詩人である。本書は季刊誌『山の本』に2006～13年、30回にわたって連載された「山の声」がベースとなっている。今回本書発行に当たって、それを「大幅に手を入れて」（著者あとがきより）何篇か入れ替えたもので、北は利尻山から南は開聞岳まで30座の紀行文から成っている。

タイトルにあるように「山に遊ぶ」ことも信条とする著者には、自分なりの遊び方、愉しみ方があると言う。それは「のぞむ山について事前にちよつと下調べという知識をもつて向かうこと。それは山城や周辺をめぐる地誌や民俗となるが、わけても詩歌である」（あとがき）。

誰でも山に行くときには下調べをすと思うが、多くは単に「登山」に必要な情報、すなわち登山道や小屋の情報の収集に過ぎない場合がほとんどではないか。「山を

図書受入報告(2014年10月)

編 著 者	書 名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
柴崎文一	アメリカ自然思想の源流 : フロントカントリーとバックカントリー	307p/20cm	明治大学出版会	2014	著者寄贈
志水哲也	剣(写真集) : TSURUGI	96p/26cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
辰野勇	モンベル7つの決断 : アウトドアビジネスの舞台裏 (ヤマケイ新書 YS002)	190p/18cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
山野井泰史	アルピニズムと死 : 僕が登り続けてこられた理由 (ヤマケイ新書 YS001)	189p/18cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
笹原芳樹	体験的山道具考 : プロが教える使いこなしのコツ (ヤマケイ新書 YS004)	286p/18cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
大森久雄(編)	山の名作読み歩き : 読んで味わう山の楽しみ (ヤマケイ新書 YS003)	302p/18cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
佐藤明(編著)	西上州の山 ベスト100ルート : 妙義山から両神山まで	224p/21cm	白山書房	2014	出版社寄贈
濱村信	俺山 その後	223p/19cm	書苑新社	2014	著者寄贈
Bernard Newman (ed.)	The Alpine Journal 2014 (Vol.118)	427p/23cm	Alpine Club	2014	発行者寄贈
D. MacDonald, etc. (eds.)	The American Alpine Journal 2014 (Vol.56, Iss.88)	400p/23cm	AAC Press	2014	発行者寄贈

愉しむ」ために果たして私たちは何を準備するのだろうか。

著者は文学作品の写しを携えて山に行き、その抱かれています山について書かれた詩歌などを想い浮かべるのだ。それらの一節が紀行文の中にちりばめられているのである。

例えば「葉師岳」には田部重治の「葉師岳と有峯」、福田蓼汀の「葉師岳から笠ヶ岳へ」、宮本常一の「中世社会の残存」のコピーを携行する、といった具合だ。

『日本百名山』や先人の著名な山岳書は読んでいる私たちでも、コピーを持っていくことまではあまりしない。そこが著者の詩人たる愉しみなのだ。

各文章には小タイトルもあつて実にテンポよく読める。やはり言葉づかいや体言止めなど、詩のリズムとでも言うのだろうか、山に遊び山を想う著者の姿が生き活きと伝わってくる。

いつの間にか自分もズブロッカを舐めて山を眺めているかのように思えてしまう。

そして引用される作品を読んてみたくなる。まさに新しいスタイルの紀行と言つてよいと思うし、新たな山の愉しみ方を教えられた

気がするのである。あとがきで著者は「山岳と詩歌の婚姻……。そんなことを頭の隅において、ここまで熱く書きついできた」と書かれ

ている。文学に造詣の深い著者でなければできない一冊と言えよう。
(荒井正人)



平成26年度第6回(10月度)理事会 議事録

日時 平成26年10月8日(水)19時00分～20時50分

場所 日本山岳会集会室

【出席者】森会長、節田・古野各副

会長、高原・吉川・佐藤各

常務理事、勝山・山田・野

口・大槻・落合・川瀬・山

賀・直江各理事、浜崎監事

【欠席者】黒川副会長・吉永監事

【審議事項】

1・「C-25 遭難対策規程」の制定について

平成25年度10月度理事会から4回にわたり協議された「本会主催山行における山行連絡及び事故連

絡フロー」について、規程として位置付けるため、別添資料に基づき審議した。〈賛成14 反対なしで承認〉

2・110周年記念事業・旅行業者選定及び発注書発行について

110周年記念事業における記念ツアーにかかる旅行業者の選定は、そのプロセスの法令順守、公平性の確保のため設置された業者選定作業小委員会(委員長・森会長)を2回開催し検討した。その結果、株式会社アトラストレック及びアルパインツアーサービス株式会社の2社を選定し、発注書を発行することとした。これらの経緯を記した別添議案により審議した。〈賛成14、反対なしで承認〉

3・入会希望者について

標記について、別添議案により5名の入会について審議した。(賛成14、反対なしで承認)

【協議事項】

1・新入会員オリエンテーションの刷新について(高原)

総務委員会から提案のあった、現在年1回開催している「新入会員オリエンテーション」を、入会希望者にも適用できる「説明会」に変更して開催することについて、別添資料により協議した。継続協議とする。

【報告事項】

1・平成26年度名誉会員の推薦について(高原)

9月末の期限までに推薦がなく、本年度は該当者なしとする。

2・平成26年度新永年会員について(高原)

別添資料のとおり49名が新永年会員に該当する。

3・次期役員等の選出について(高原)

任期等について定款及び規程類による確認が資料に基づきあった。
4・「日本山岳会の財政問題(1)」

について(吉川)

会員数減少及び会員の高齢化等が及ぼす日本山岳会の財政への影響等について、別添資料により財務担当理事の立場から報告があった。

5・寄付金・助成金の受入事前申請／報告／確認及び受入報告について(吉川)

寄付金・助成金の受入事前申請1件、受入報告6件について報告があった。

6・110周年記念事業について(古野・佐藤)

現在の進捗状況の報告があった。学生部女子ムスタン登山隊による未踏峰登頂の状況等の報告があった。また、年次晩餐会の案内に、女子隊に併せて来年海外派遣予定の男子隊についての寄付金願いを同封することについて報告があった。
7・日中韓三国学生交流登山の韓国での打合せ備忘録について(古野)

8月に韓国で開催された日中韓三国学生交流登山の際に各国団長の間で合意された2015年の中国開催、2016年の日本開催の備忘録について報告があった。
8・上高地梓川右岸専用水道事業

組合からの組合加入承認文書受領等について(大槻)

別添のとおり標記組合より承認文書が届いた。ついては、加入負担金160万円の支払いが発生した。その他、上高地山研のテラス工事の見積書を受領した。

9・YOUTH CLUB全国安全登山実技指導講習会(剣岳)について(古野)

9月18日～23日の間、国立登山研修所剣沢夏山前進基地をベースに開催し、本部YOUTH CLUBと4支部合計32名の会員が参加した。登攀技術の向上及びリーダー育成に成果があった。

10・電子国土賞の応募について(佐藤)

当会から推薦した1件が2次選考に進んでいるとの報告があった。
11・平成26年度支部合同会議開催について(高原)

9月20日～21日に開催された標記会議の報告が別添のとおりあった。

12・D-7「JACCマーク使用要領」制定について(高原)

当会が商標登録している「JACCマーク」の使用について、これまで明文化されていなかったことが

ら、新たに標記要領を定めたとの報告があった。

13・国立国会図書館から、同館が国立国会図書館法に基づき実施しているインターネット資料収集保存事業の一環として、当会のホームページを収集・保存の対象としてとの申し出があり、これを許諾したとの報告があった。(佐藤)
14・東京多摩支部から支部創立5周年の記念品として作成する日本手ぬぐいに「JACCマーク」を使用したいとの申請があり許可した。(高原)

15・(株)プラネットライツから同社が発行する月刊誌「男の隠れ家」にウェストン卿の写真を掲載したいとの申請があり許可した。(節田)
16・富山県立山博物館から『山岳』の写真・図を特別企画展等の展示パネル、解説図録に掲載したいとの申請があり許可した。(節田)
17・「山」10月号の発行について報告があった。(節田)

【今後の予定】

1・当会創立記念日 10月14日(火) ルーム休み
2・平成26年度第2回評議員懇談会 10月17日(金)16時

3・晩餐会 12月6日(土) 新宿・京王プラザホテル18時
4・支部長会議 12月6日(土)10時30分〜新宿・京王プラザホテル
5・日本山岳協会「広島山岳平和祭」11月22日〜26日平和公園、宮島 以上

平成26年度第7回(11月度)理事会案内

日時 平成26年11月12日(水)19時より
場所 日本山岳会集会室
議題 1・平成26年度秩父宮記念山岳賞の推薦について
 2・その他

ルーム目誌 10月

1日 常務理事会 集委会員会
 YOUTH CLUB
 2日 支部事業委員会
 3日 図書委員会
 4日 緑爽会
 6日 総務委員会 スキークラブ
 「家族登山」普及委員会
 7日 110周年記念事業実行PT スケッチクラブ
 8日 理事会 休山会 山想倶楽部

9日 フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ みちのり山の会
 10日 九五会
 15日 三水会 青年部 つくも会
 16日 科学委員会 スキークラブ
 17日 評議員懇談会 「山の日」事業委員会 スケッチクラブ
 18日 SUN燦会 山の自然学研究会

20日 緑爽会 総務委員会 資料映像委員会 バックカントリークラブ
 21日 00会 山岳研究所運営委員会 海外委員会
 22日 自然保護委員会 遭難対策委員会
 23日 学生会 01会 公益法人運営委員会
 24日 スケッチクラブ 緑爽会
 27日 YOUTH CLUB
 28日 集委会員会 デジタルメディア委員会
 29日 会員データ管理システムWG 麗山会
 30日 海外委員会 総務委員会
 「家族登山」普及委員会
 山遊会
 10月来室者 587名

会員異動(10月分)

物故

大谷一良(4577) 14・9・21
 吉永定雄(6097) 14・9・28
 田辺恵造(6364) 14・10・21
 伊藤敏男(6725) 14・8・24
 高澤英雄(7956) 14・10・11

INFORM
 O R M
 インフォメーション
 A T I N
 O

◆高峰高原スノートレック

集委会員会

料理自慢のホテルに宿泊し、インタープリターとともにスノーシューで高峰山、黒斑山を闊歩します。スノーシューセットのレンタルもあります。

日程 2月21日(土)〜22日(日) 1泊2日

集合 21日 9時30分 JR長野

宿泊 新幹線佐久平駅

解散 高峰高原ホテル

費用 2万円(宿泊、現地交通費、平駅 佐久

22日 16時30分ごろ 佐久

佐藤隆男(9456) 14・9・1
 中山 誠(14005) 14・10・23
 阿部 浩(14330) 14・10・19

退会

小野木伸夫(9032) 越後
 豊城邦民(10183) 京都・滋賀
 大野七範(15074) 東海

定員 14名

申込者に詳細をお送りします。

申込 1月15日までに 植木淑美

宛。FAX 042734114

98または syukai@jac.or.jp



日本山岳会蔵資料紹介 No.16

[資産番号] 10048、10063、10071、121
 [資料名] 中村清太郎山岳画
 [部門名] 絵画
 [寄贈者] 不明
 [受入日] 不明



①初夏の槍ヶ岳



②田代池の白樺 神河内・田代池にて
(大正13年作)



③雪溪 長次郎谷

中村清太郎(1888～1967)は、「山を描く画家の集団」として1936(昭和11)年に創立された日本山岳画協会の創立会員の一人である。ほかに足立源一郎、茨木猪之吉、石川滋彦、小菅徳二、丸山晚霞、武井真澄、吉田博、末光清、内野猛が、顧問に小島烏水、藤木九三の名がある。1908年、日本山岳会に入会(会員番号153)。入会後は『山岳』に多くの作品を提供している。

また先駆的な登山を行ない、登山史に名を残している。1910(明治43)年7～8月、鹿島槍ヶ岳から蓮華岳までの後立山連峰縦走や、黒部源流の山々を経て槍ヶ岳までの縦走(同行者/辻本満丸、三枝威之介)、小島烏水らとの赤石山脈初縦走や聖岳などの初登山は登山史に残る。さらに、針ノ木岳の命名、新種となる日本産の高山蝶「クモマツマキチョウ」の発見者としても知られる。

当会には絵画(油絵)4点が寄贈されている。3点は当会に展示、1点(「白馬岳」・50号)は市立大町山岳博物館に寄託している。今号では本会に展示されている写真①～③の3点を紹介する。絵画①初夏の槍ヶ岳(10号、ロビーに展示)、②田代池の白樺(変形6、104号室に展示)、③雪溪(104号室に展示)である。なお、①と③の制作日については記載がない。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会へアクセスすると、「会報ページそのもの」を「拡大およびカラー」で見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。

✉ jacshiryol02@jac.or.jp (資料映像委員会)

◆編集後記◆

●先月のネパールから香港の山へと出張が続き、今月号も担当理事の節田重節副会長と編集スタッフの原邦三さんにほとんどの作業をお任せしたままです。毎号を綱渡りのようになんとか繋いでおりますが、ネパールではひよんな出会いもありました。

●カトマンズでは、いつも寄稿くださるM会員と同じ宿になり、夕食や朝食をともしました。長年国内外の山を歩いていらつしやる話は、とても興味深かったです。その約10日後、クインプのティンポという村(春から秋の間だけ放牧のためのカルカと一軒の宿ができる)では、ロールワリンからテシ・ラブチャを越えてきたO理事と顔合わせ。山の世界は案外狭いものだと思いました。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 834号

2014年(平成26年)11月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 森 武昭
 編集人 柏 澄子
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社